

ホイトマン教説の輪郭

清 水 春 雄

ホイトマンの詩集『草の葉』に盛られた約四〇〇の詩篇の中には、一個の独立した作品として見た場合、美しくまとまっていると言うことのできるものは、比較的少数なく、断片的な感じを与えるものが目立っている。しかしそれらは感情のゆらぐがままに、その場かぎりに詠嘆の叫びをまき散らしたのではなく、永年にわたって魂の奥底に抱かれていた信念の現われを集録したものである。

たしかに自らも認めている通り、矛盾した言葉も多く、一見無意味と思われる語の羅列や、逆説的な表現などで、真意の把握を妨げられる場合が多い。しかしこの詩集を通読すれば、彼の詩のすべてが終局的には或る一つの方向を目指しているということが明かになる。もとより枝葉の点ではいろいろの解釈も成り立つであろうが、眼目については、こう言うことができよう。即ち、彼は人類の未来の完成を夢みながら、その達成のために宗教的とも見られるデモクラシーの思想を説こうとしているのであると。

彼の詩集はよく譬えられることであるが、一つの有機体と見られている。それは、初版（一八五五年）から臨終版（一八九二年）にいたる約十版の間に、しばしば改訂を加えられた詩集そのものの成長の過程からもそうであるが、より多く、そこに盛られた詩の相互間の関連性によっている。どこを傷つけられてもその人の血が出るように、『草の葉』のどの一篇の詩をとり出しても、デモクラシーの香りのしないものはない。しかし二六時中、デモクラシーを唱えているわけではなく、様々な主張を通じているのである。いまその終局的な思想にいたる過程、並びにその根本となる観念について彼の説くところを考察して見たいと思う。

詩のことであるから、考えが理論的に整然と首尾をたてて説かれてはいない。詩は須らく *indirect* 或は *suggestive* たれというのが彼の主張であるが、そのために象徴的なイメージを盛に利用して、彼の考えを読者の心に写そうとしている。意識の流れに浮かぶうたかたの如く雑多なイメージが現われては消えはするが、断片的であっても繰返されるところに或る思想の流れが感得せられる。こうして彼の片言隻語ともおぼしき語句であっても、集めてみると判然と彼の考えを把握するのに役立つ。

ホイットマンは元来宗教心の強い一種の神秘家であって、根本的に万有靈魂、靈魂不滅、宇宙進化の信念、つまり一口に言って汎神論的進化論を抱えていることが判る。彼はこの基本観念を土台としてその上に、自己、個人、大衆靈魂、肉体、死生、男女、性、成長、善悪、自然、時間、空間、自由、平等、愛、戦争、平和、アメリカ、新詩など、広範囲のテーマを立てて、いわば永遠の生命の讃歌をかなでながら、宗教的なデモクラシーを説いているのである。諸テーマの有機的な関連のために各項を切り離すことは困難であるが、いま表面に出ている主な主張である自然、自由、平等の礼讃、靈肉一致、死生一如、友愛、完全国家、新詩等の諸論に耳傾けて、その宗教観、哲学観の輪郭を考察することとしたい。本稿の趣旨はホイットマンの教説の大要を掴む上に便なるよう分類例証を主としたものであ

る。なお紙数の都合上本篇は前半にとどめる。

一 自然・宇宙進化

ホイトマンが『草の葉』のなかで最初に自己を登場させている場合、その姿の現われる舞台は、わが家でもなく、仕事場でもなく、学校や教会では勿論ない。「私はさまよい歩き、わが魂を招く、私は一本の夏草をじっと見ながら、思いのままによりかかり、⁽¹⁾またさまよい歩く。」というのであるから、まず自然を相手とすると宣言していることになる。従って、「今、私はあらゆる哲学と宗教とを再吟味する、それらは講義室では見事に立証されるかも知れないが、広大な雲の下、或は山水の風景や、流れる潮の傍らにあっては到底立証されないであろう。」⁽²⁾と言って、哲学も宗教も机を前にした論議で会得できるものではないとするホイトマンの態度が、容易にうなずかれるのである。

彼は、「大気、水、大地の不断の教訓を探究せねばならぬ。」⁽³⁾と戸外に出て、「曙の空を仰ぐ！／かすかな光がはてしなく拡がる透明な陰影を追いのける、／大気は私の味覚にまことに快く感ぜられる。」⁽⁴⁾と黎明の大気の快適さを讃える。「おお、天の星よ、私はここでお前達がささやいているのを聞く、／おお、恒星よ、おお墓場の草よ、おお、絶え間なき転移と向上よ、／若しお前たちが何事も語らなかつたならば、どうして私が何かを語り得よう。」⁽⁵⁾「おお、潮よ、お前について神秘的な人生の意義を捉えた、」⁽⁶⁾と歌っているが、星のまたたき、草のそよぎ、潮の満干は彼に何を語ったか、自然の転移向上とは何か、神秘的な人生の意義とは何か。

自己の作品は、つねに自然の教えに耳傾け、その黙示から生れたものであるとしているので、彼はそれらの作品を理解するためには書物に囚われた頭では不適當であるという。「若し君が私を理解しようと思えば、高地か水際にゆくがよい、／手近かのぶよが一つの解説だ、波のひと雫かひと揺らぎが鍵となる、」⁽⁷⁾と戸外に誘う。「思うにあらゆ

る偉大な行為は、すべて外気の中で考え出されたものである、すべての自由な詩歌もまた同様である。⁽⁸⁾ それで私の本も自然の中で読んでこそ始めて納得がゆくとの意を表わして言う。「屋根のある家の部屋や、人の集まる中に私は姿を現わさない／……海辺で、或はどこか静かな孤島の上で、／君に唇を許す。⁽⁹⁾」

彼がこのように惹かれるのは自然のどういふ点であろうか。その自然礼讃の辞を聞こう。彼は「宇宙」 *Kosmos* と題して、

雑多なものを包含するもの、それは自然、

大地の宏量と、大地の粗雑と性別と、大地の大いなる慈善と、またその均衡をも表わすもの、

と、まず大地の不同を包括する宏量博大を讃えている。「地球は与え惜しむことがない、まことに寛大である／……それは人類を包摂し、一切のものを包含し宥め和らげ支える……⁽¹⁰⁾」そこからして、「政治も宗教も……それが地球の博大さに比較されるものでなければ何の価値もない、／それが地球の正確さ、活力、不偏、公正と立ち向えるものでなければ何の価値もない⁽¹¹⁾」と現実的な意見も明かにされている。そして更に実際的には、大統領選挙に当たっての感想として「あなたは自然について学んでいない——自然の政治について、その偉大な豊かさ、公正不偏について、／そういうものだけがわが諸州に必要なのだ、⁽¹²⁾」と述べている。

ホイットマンには、「私は一個の宇宙」であるという句がある。「人間は小宇宙」であるという考えは格別目新しいものではなく、古くはストア学派の祖 Zenon (336～264 BC) の句として伝えられている。彼によれば世界はロゴスによって計画的に創造され支配されていると見ているので、その場合ロゴスは理法であり理性である。従って Zenon が「人間は小宇宙」と考えたのは、その本質を理性であるとしているので、彼の言わんとするところは、人間は理性に従う生活をなすべきであるという点を強調するにある。ところがホイットマンにあっては、こうした理法

の上に、博大な地球や自然のもつ雅量と更に地球にひそめられた激情をも思ひながら歌っているのである、次の詩句がそのことを明かに示している。

Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,

Turbulent, fleshly, sensual, eating, drinking and breeding,⁽¹³⁾

私はウォルト・ホイットマン、一つの宇宙、マンハッタンの子、

激しく、よく肥え、肉感的で、食い、飲み、且つ産む、

言うまでもなく、コスモスとは秩序ある宇宙という意味なので、彼もこの語を雑多の統一という意味を主に用いている。彼の有名な句である、「私が矛盾しているというのか、それならばそれで結構だ、私は矛盾している、(私は大きい、私は多くのものを包含している、⁽¹⁴⁾)」というのも、広大なる自然を以て自ら任じているところによる。

地球の正確さについては、上にも触れているが、更に、「この円い、やさしい地球は、一秒の狂いもなく、永遠にその軌道を規則正しく動いている」⁽¹⁵⁾のは素晴らしいと歌い、全宇宙についても、「一切のものは一つの行列である、／宇宙は規則正しい完全な運行をもつ一つの行列である、」⁽¹⁶⁾「宇宙の不動の秩序、」⁽¹⁷⁾「宇宙は正しく秩序整然としており、一切のものがその所を得ている、」⁽¹⁸⁾と秩序の正しく保たれていることを讃えている。この規則正しい宇宙は無限大である。「私の太陽は、彼の太陽をもち、そしてその周辺を従順に回転する、／彼はその仲間とともにより優れた周行の一団に加わる、／しかも更に次々と大きい組が現われる……」⁽¹⁹⁾こうした広大無辺の宇宙は見事に均衡がとれている。「月が地球の周りをめぐり、地球と一緒に回るといふのは素晴らしい、／また彼らが太陽や他の恒星とともに自ら均衡を保っていることも素晴らしい。」⁽²⁰⁾

You tides with ceaseless swell! you power that does this work!

You unseen force, centripetal, centrifugal, through space's spread,

Rapport of sun, moon, earth, and all the constellations,

.....

What central heart—and you the pulse—vivifies all? what boundless aggregate of all?⁽²¹⁾

汝、絶え間なくゆれる潮よ！この働きをなす力！

汝、はてなき空間をわたる求心遠心の見えぬ力、

太陽、月、地球あらゆる天体との縁に連なる潮よ、

.....

万有に生氣を与える中央の心臓は何か——汝のその脈搏——一切のものの無限の凝集は何か。

この世界に遍在する見えぬ力、心と生命の脈搏は、すべての原因で、最後の目的であり、「すべての可見の宇宙はそれがために存在する」⁽²²⁾「天来の謎である。この謎の解釈が講堂では得られないと言うのである。「偉大な法則は議論なしに受け入れられまた流れ出る……私は横たわって余念なく万象の美しい物語りや、万象の意義に耳傾ける。」⁽²³⁾「論理学や説教は人を納得させない、夜の湿気が私の魂に深く泌みこむ」⁽²⁴⁾」

こうした自然を前にして彼は何をさとしたのであろうか、草の上や或は星空の下、浜辺をさまよいながら考えたことが真実であった⁽²⁵⁾と言うが、それは何を悟ったのか、宇宙の規則正しき、均衡を支えているあるもの、宇宙を宇宙たらしめているもの、星を星たらしめ、草を草たらしめ、私を私たらしめているあるもの、こうしてすべての可見のもの背後に「あるもの」を認める。宇宙の一切がその所を得ているのは、この一切にわたる不可見の、「あるもの」のためではないか。ホイットマンはこの一切にわたる同一性の「あるもの」を靈魂と見たのである、そして

A vast similitude interlocks all, (26)

巨大な相似が一切を繋ぐ、

という考えが生まれている。結局、宇宙の万象は本体たる靈魂の現象として現われた眼に見える姿に過ぎない。即ち、靈魂は水であり、万象は波であると譬えられる水波不二の關係に把握されている。これは所謂哲学者が思弁的な考究のあげく辿りつく究極存在の概念に類する。但し彼の場合はスピノザ的な究極原因よりも、動的要素を重視する点でヘーゲルの絶対精神に近い。ただ彼の場合は極めて直観的で感性的な点に相違がある。

自然礼讃の言葉は『草の葉』ばかりではなく、彼の他の散文にも極めて多く現われている。例えば『民主主義展望』でも「野や丘や湖の爽やかな風は、象牙の扇におくられる香料の匂に勝る。」と述べている。『自選日記』中の「日光浴——裸体」A Sun-Bath——Nakedness では、人目を避けて森の中で日光浴をし、自然の甘美な健全なそして静寂な赤裸々との接触を楽しんでいる場面がある。

また最近発見された「森のにおい」Wood Odors という詩も、自然との接触にしみじみとした魂の喜びを味わっている感懐がしのばれる。短いのでその全文を紹介しよう。「夜来の雨もはれた朝／爽涼の夏のかおり／松と檜のにおい／樹蔭。——人影もなき道をさまよえば——心やわらぐ静けさ、／静寂とたれこめたヴェール／寺院の無数の生きた円柱／聖なる安息日の朝。奥まった深所の芳香と鳥の歌声／だが微妙なにおいが最も靈魂に適う／梢を通して仰ぐ空／五月のすべての若々しい繁茂と緑の成熟／手近な白いしゃくなげの花／足もとにはなでしこ——頭上には、黄色いコップ形の花をつけた堂々たるゆりの木。ねこ鳥のにゃおにゃお、こま鳥のこっこっ、楽しいつぐみの鳴く声 これらの上にまた下に、静けさのなかに、微妙な森のにおい／小鳥は木立を縫って飛ぶ／古い葡萄づるのもつれたなかを。」この詩の発見のニュースは一九六〇年十一月二十二日付の The

New York Times に現われ、次いで翌十二月号の Harper's Magazine (p. 43) に掲載された。それによると、カリフォルニア州グレンデールの或る屋根裏部屋に埋もれていたホイットマンの遺稿を整理中 Dr. Rena V. Grant が発見したものであって原稿は鉛筆書であるという。同女史は、この詩は詩人の幻想の瞬間を写したもので、日本の俳句に似た手法をもつ美事な作であると評し、一八八四年五月初旬の作ならんと推定している。

ホイットマンには宇宙の目的は有機体を生ずるにありとするヘーゲル的な考えがある。南北戦争以前のことであるが、彼が奴隷市場へ行って競売を見たとして歌っている中に、「競売されている男子の肉体、／せり手のつけ値がいくらであろうと、肉体に対してこれで充分だということはない、／肉体のために地球は一匹の獣も一本の草もないままに、幾億兆年もの間準備して来たのだ、／肉体のために循環する年月は忠実に断え間もなく回転していた⁽²⁷⁾。」という句がある。これは彼の抱く宇宙進化の理念を示すものであるが、この考えに沿った句を他に求めると先ず有機体誕生の経過が説かれている。「この広大な地球の中に、／無限の粗雑さと鋳滓との中に、／そのまっ只中の核心に包まれて、安全に、／完璧な種子が横たわっている⁽²⁸⁾。「よく匿されている無限の小さい蕾、／雪や氷の下に、暗闇の下に、どんな小さい場所にも、／繊細なレースに包まれた胚種の、精妙な、極く小さい未だ生れないもの⁽²⁹⁾、」それは幾世紀も顧みられぬ種子であって、地中に埋もれたままになっているが、「神慮による機会さえ到来すれば、夜中に起きて芽をふく⁽³⁰⁾、」のである。尤も神慮といっても単なる超越的な神の意ではなく、宇宙の霊の力という意味である。

次に胚種から人間体の完成までを見よう。「私のための準備は測り知れない莫大のものであった、／私を助けた腕は忠実で親切であった。／時の輪環は快活な舟人のように漕ぎに漕いで、私の揺籃を渡してくれた、／……私が母

から生れ出る前に幾世代もの人が私を導いてくれた、／私の胚種は決して生気を失わなかった——何もかもそれを押しつぶすことができなかった⁽³¹⁾。「私達は幾億兆の冬と夏とを使い尽して来た⁽³²⁾。「何ものかが永い間準備されていて、次に無形なものが到来して、君のうちに形をなしたのだ⁽³³⁾。」これは有機体の発生を指す。

一個の人体の成り立つにいたる過去を振り返れば、鉱物的、植物的、動物的要素のすべてを我が身に含んでいることとなる。そこから、「私達は自然だ……／私達は植物となり、幹となり葉となり、根となり、樹皮となる、／私達は地下におかれた、私達は岩石だ⁽³⁴⁾。」という句や、自己の素因を考えて、「私は自分が片麻岩や石炭、根のつながった苔や、果実、穀物、菜根と組合わされているのを発見する、／私の全身は四足獣と鳥類をもって塗り固められている、／……私の近づくのに対して、火成岩がその昔の熱気を放出しても無駄である、／……海鳥がラプラドルの北へと飛翔し去っても無駄である。」「私は素早くその路を追い断崖の裂目に作られた巢へと登って行く⁽³⁵⁾。」という句が生まれている。人間と万物との繋がりを感じさせるものである。

ホイトマンは少年の頃から、目に触れ耳に聞こえる一切のものになり切ることができたというが、それは一切のものを吸収して、そのものの心に入ることを意味する。そうした心境に容易になることができたのは、それらのものがわが身の一部であると感じていたからであって、動物にも植物の中にもわが心を見出したのである。「彼らはどこでそれらの形見を手に入れたのであろう、／遠い昔に私があの方面を通り過ぎたとき迂濶にもそれらを落して来たのでなからうか、／私自身がその時も今も、そして永遠に前進し移動して行く⁽³⁶⁾。」

すべてのものが前進し向上するという考えは初期の作品から晩年の作品に至る迄繰り返し現われている。「一切のものは上へ上へと、そして外方へと進み、崩壊するものは何もない⁽³⁷⁾。」「地球は常に前へとつき進む！太陽と月と星は常に前へ前へと突進する⁽³⁸⁾！」これは単に天体の運行を意味するのではなくそれと共に流水や草木の成長に見る生命の躍

進を感じているのである。また、*Going Somewhere* という詩の中で、彼の知っている学芸上の友達で今はイギリスの墓に眠っている人——これは勿論彼を慕って曾てアメリカに移り住んだことのあるギルクリスト夫人を指すことは明かである——が語った言葉として、古今の学問、直観、地質学、天文学、歴史、形而上学などについて、「一切のものを決定する答えは、私達はみな前へ前へとしずかに速力を進めながら、確実に向上しているということですよ」というのを挙げて共感を示している。

万物は永遠に前へ進むとして、何所へ行くのであろうか、「彼らは行く！彼らは行く！私は彼らの行くのを知っているが何所へ行くのかは知らない、／しかし、たしかに最善のものに向って——何か偉大なものに向って行くことだけはわかっている。⁽³⁹⁾」高きを目指して進むものの一員として、自己を描いて歌っている。「私の足は階梯の頂点のまた頂点を踏んで登る、／一段毎に一群の時代があり、段と段との間に数群の時代の大束がある、／すべて足下にあるものは、まさしく私が旅して来た跡、私はなおも上へ上へと登る、／……遙かに下方に私は巨大な最初の『無』を見る、私はそこにさえ曾ていたことがあるのを知っている、⁽⁴⁰⁾」その辿って来た道は簡単な一直線ではなく、丁度永い航海を続けた船旅のコースのように、「大迂回した螺旋状の経路であり、そのために、部分的なものは永遠のものに向って流れ、そのために、現実的なものは理想的なものに向ってゆく。⁽⁴¹⁾」

至高のものに向って、或は何か偉大なものに向ってゆくという考えの根拠は何か、それは全宇宙の善を信ずる信念であろうが、ここに彼にとって万象の向上を思わしめる手近かなしかし重要な要因がある。それは地球の善化の働き、浄化作用である。「おお、この大地が病氣にかからないのは、一体どういう訳か、／春毎に芽生え出るもの、お前は どうして生氣に充ちておられるのか。／草、根、果樹、穀物の汁液よ、お前は どうして健康をもたらすのだ。／人間は断えずお前の中に、病死した人の屍体を押し込んではいないか。／……お前は 彼らの亡骸を何所に始末し

たのか。⁽⁴²⁾」「見よ、この堆肥を！よくそれを見よ！／恐らくどの小さな一かけらも曾ては病人の身体の一部であつたに違いない、しかも見よ！／春の草は大草原を蔽つて茂る、／……何という魔術であらう！／あらゆる空気の流が毒気を含んでいないということ、／……私が草原に横たわつても何の病気にもかからぬということ、／しかもその草の一本一本が、恐らく曾ては伝染性の病気であつたものから生い出ているのだ。／私はいまこの『地球』に驚くばかりだ、それは沈着で忍耐強い、／それはこうした腐敗の中から、こうした香わしいものを生み出す、／このように次々と限りなく病死体を受入れながら、害も受けず汚されもせず、その軸のまわりに回転している。⁽⁴³⁾」
屍体を肥料と見る例を他の詩に見ると、「汝、屍体よ、お前はよき肥料だと考えるが、しかしそのために不快には感じない、／私は芳しく薫り成長する白バラの花を嗅ぐ、⁽⁴⁴⁾」という句もある。

腐爛した屍体から健康や歓喜が生れ出るといふ考えは、大地の浄化作用そのものを讃えるために屢々表現されているといふよりは、寧ろ生命の還元の意味がある。「一切のものは不滅なもののために在る……自然の善化は一切のものを祝福する、⁽⁴⁵⁾」のであつて、このような神秘的進化のあるところ、正しいものが認容されるばかりでなく、悪と呼ばれるものも認容される。「『改善』は地球の言葉の一つである、／地球はぐずぐずすることもなく、急ぎもしない、／それは最初から自分の中に潜めて、あらゆる特質と生長と成果とを具えている、／それはただ美しいだけではなく、完全なものと同じ程度にその欠点や無用なものを表わしている。⁽⁴⁶⁾」

その改善 amelioration 或は神秘的進化 mystic evolution の過程において、悪や欠点の存在はどうなるか。これについては彼の比較的晩年の作である、ヘーゲル読後感を歌つた二行の詩がよい説明を与える。⁽⁴⁷⁾

宇宙についての思索のうちさまよつて、私は「善」なるいくらかのものが、不滅に向つて着実に急いでゆく
のを見た、

また、すべて「悪」と呼ばれる多くのものが自らのうちに没入しようと急ぎ、ついに滅び絶えるのを私は見た。このように善化の運動をつづける全宇宙を想って彼は歌う。「快適な心地で私は歩いてゆく、／私が何所へ歩いてゆくのか、私にははっきり言うことができない、／しかし私はそれが善なることを知っている、／全宇宙はその善なることを示している、／過去と現在がその善なることを示している。⁽⁴⁸⁾」これがホイットマンの抱く宇宙進化の確信である。

- (1) *Song of Myself*, 1.
- (2) *Song of the Open Road*, 6.
- (3) *Myself and Mine*.
- (4) *Song of Myself*, 24.
- (5) *Ibid.*, 49.
- (6) *Then Last of All*.
- (7) *Song of Myself*, 47.
- (8) *Song of the Open Road*, 4.
- (9) *Whoever You are Holding Me Now in Hand*.
- (10) *A Song of the Rolling Earth*, 1.
- (11) *Ibid.*, 3.
- (12) *To a President*.
- (13) *Song of Myself*, 24.
- (14) *Ibid.*, 51.
- (15) *Who Learns My Lesson Complete?*
- (16) *I Sing the Body Electric*, 6.
- (17) *Song of Prudence*.

- (18) *The Sleepers, 7.*
- (19) *Song of Myself, 45.*
- (20) *Who Learns My Lesson Complete ?*
- (21) *You Tide with Ceaseless Swell.*
- (22) *A Riddle Song.*
- (23) *Who Learns My Lesson Complete ?*
- (24) *Song of Myself, 30.*
- (25) *Ibid., 33.*
- (26) *On the Beach at Night Alone.*
- (27) *I Sing the Body Electric, 7.*
- (28) *Song of the Universe, 1.*
- (29) *Unseen Buds.*
- (30) *Passage to India, 6.*
- (31) *Song of Myself, 44.*
- (32) *Ibid.*
- (33) *To Think of Time, 7.*
- (34) *We Two, How Long We were Fool'd.*
- (35) *Song of Myself, 31.*
- (36) *Ibid., 32.*
- (37) *Ibid., 6.*
- (38) *Song at Sunset.*
- (39) *Song of the Open Road, 13.*
- (40) *Song of Myself, 44.*
- (41) *Song of the Universal, 2*

- (42) *This Compost*, 1.
 (43) *Ibid.*, 2.
 (44) *Song of Myself*, 49.
 (45) *Song of the Universe*, 4.
 (46) *A Song of the Rolling Earth*, 1.
 (47) *Roaming in Thought (After reading Hegel)*
 (なおホイットマンとヘーゲルの関係については拙著「ホイットマンの心象研究」第九章二〇六一—二一一頁を参照され
 たい。)
 (48) *To Think of Time*, 8.

二 自由・平等

自然礼讃の根底には当然のこととして、天衣無縫の自由への憧れが含まれている。ホイットマンは精神的であれ肉体的であれ、何ものにも囚われない無拘束の自由を求めている。「自己の歌」の第一節で、自己を讃えるという宣言をした後、最初に述べている主張は、「色々な教義や学派に囚われず、万難を排して自己の思うところを存分に語る」ということである。そして第二節において、「香料のかおりに満ちた室内よりも、戸外の大気を好み森の辺りで裸になる」というのも、屋内的な書物や形式にとらわれない自然の自由を喜ぶという意を示す。その節で、

今日一日一晚、私と一緒にいたまえ、そうすれば君はあらゆる詩の根源を掴むことができよう、

君は地球や太陽の精髓を手に入れることができよう、(まだ無数の太陽が残されている、)

君はもう二度三度と人手に渡った古物を手に入れることなく、死者の眼を通して物を見ることもなく、書物の中の亡霊に養われることもないであろう。

君は私の眼を通してものを見ることもなければ、私の手から取ってゆくこともない。

君は周囲に耳傾けて、君自身から物事を濾過して手に入れるであろう。

と述べているが、二番煎じ三番煎じの他人の意見を受け売りすることなく、先人の記録だからといって盲信することなく、自己の自由な裁量によって物事を決すべきであると説く。またこの自由人は、「私は家の中であろうと外であろうと、気の向いたままに帽子を被っている、／なぜ私は祈らねばならないのか、なぜ私は恭しくしたり、儀式張らねばならないのか、／地層をせんさくし、髪の毛一本までも分析し、博士達に相談もし、綿密に計算して見たが、／私自身の骨に密着している脂肉より味のよいものは見出されない。」と自己の自由な思索、自由な行動を薦めている。これは「何人にも隷属せず一個独立の人間たる喜び」を感じ得させるためであるが、独立の人間たるためには自主独立の精神がなければならぬとして、「何人も他人のために習得してやることはできない、／何人も他人のために成長してやることはできない。」⁽³⁾「私も他の何人でも、君のためにあの大道を旅することはできない、／君は君自身であの道を往かねばならない」と訓す。⁽⁴⁾

自由の強調は各方面に現われているが、その最も著しい特徴の一つに性の自然と自由がある。因襲旧慣にとらわれるのは彼の最も忌むところであって、エデンの花園への復帰とも見られる性の解放が叫ばれている。「私は私の、そして君は君の、以前の羈絆や因襲から解放されるのだ……口を塞いでいた猿轡をとり外すのだ」⁽⁵⁾とばかり自由な裸像が飛び出して、性器も憶面もなく陳列される。性は宇宙進化の重要な一要因であるとして信じている彼には、エマソンの再三の忠言も受け入れられなかったのである。「私を通して長い間沈黙していた多くの言葉が語られる」と、⁽⁶⁾平凡なもののみならず、不具者、病人、囚人等をも含めて、暗黒界にも表現が与えられることを宣言し、更に、「禁断の言葉が私を通じて語られる、／性と煩惱の言葉、ヴェールをつけた言葉が、そして私がそのヴェールをとる、／卑

猥な言葉も私によって清く美しく姿を変える。／……性交は私にとって死と同様、少しも醜悪でない、／私は情欲とは結構なものだと信ずる。」と言いつつ性的描写を続けている。これが一般からも出版業者からも嫌われ、官庁勤めを誅首され、親友オコンナーをして“*The Good Gray Poet*”を書き彼の弁護と文学の自由を論ずるに至らしめた原因でもある。尤も *Children of Adam* の詩群は性の呪縛を解くものとしてその健康性を称讃した一部の人たち、殊に女性の人たちが最初から存在したこともたしかである。

次に社会制度上の自由について見よう。ホイットマン存命中のアメリカにおける最大の歴史的事件は南北戦争である。この戦争がなかったならば『草の葉』はなかったであろうと彼が晩年に述懐しているが、それは幾分言い過ぎの感じがあるが、とにかく同詩集成長の上から見ればこの戦争が一つの大きい転機をなしていることは間違いない。

南北戦争は奴隷解放のための戦いであるから、その戦争後の彼の詩に自由が強調されていることは当然である。

By Blue Ontario's Shore は本来一八五六年の作であるが、その第一節に加筆して、幻霊が詩人に話しかけた形で言う。「私のために詩を歌ってくれ給え、アメリカの魂から生れた詩を、私のために勝利の頌歌をうたってくれ給え、／そして『自由』の行進曲をかなで給え、これまでであったものよりも更に力強い行進曲を、」その第七節にも、「見よこの日、高く天の方へ、／征服者の戦場から還って来た『自由』を、／私は君の頭のまわりに光輪を見る、」と歌う。その円光も弱い光のようなものではなく、交錯する戦いの火焰と光を飛ばす稲妻である。第一一節にも砲煙弾雨の戦場が描かれている。それらは戦争のイメージが加わったものであるが、自由を守る闘いのはげしさを表わしているのである。こういう自由のために戦うのが詩人達の使命であるとして、その第一〇節では

偉大なる「理念」、完全にして自由な個人の理念のために、

その理念のために、指導者の中の指導者として詩人は先んじて歩む、

彼の態度は奴隷達を元気づけ、外国の暴君達を戦慄せしめる。

「自由」は滅びることなく、「平等」は退くことがない、

それらは若者達と最上の女達の感情の中に生きる。

と歌う。Drum Taps 詩群中の終りに近い、Turn O Libertad は南北戦争の終結が意味する自由の勝利を謳歌し、未来への決意をうながしているものであるが、そこでは、封建的な世界、王者の勝利、奴隷制度、族制等の讃歌から反転して、『自由』よ、おん身の不滅の顔を振り向けよ、／すべての過去よりもさらに偉大な未来の在るところへ、と叫んでいる。

自由を主題として外国の事件を扱ったものも少くない。自由の理念が外国の暴君を戦慄せしめた例として、早く一八五〇年に発表された Europe がある。それは後に『草の葉』初版に入れられ、其後 By the Roadside 詩群に含まれている。そこでは、旧大陸の残忍な王者に反抗して自由のために闘った殉難者の精神は決して滅びることではなく他の若者の中に、同胞の中に生きつづけ、王者達に反抗すると歌う。

自由のために殺された人々の墓で自由のために種子を育てないものは一つもなく、それがまた種子を生む、
風がそれを遠くへ運んで再び地に播き、そして雨と雪とが養い育てる、

暴君の武器は肉体を離脱した精霊をも放っておこうとしない、

しかし、精霊は目に見えずに地上を歩き回って、私語し、助言し、警告を与えてゆく、

「自由」よ、他の人々は君に絶望するもよい——私は断じて君に絶望はしない。^(?)

第二版には「失敗した欧羅巴の革命家」というのがあって、「更に元気を出せ、わが兄弟、わが姉妹よ、／頑張れ——『自由』はどんなことがあるかと護りたててゆかねばならぬ……どんなことがあるかと自由は滅びたのではない、

背信の徒に悉く占められたのではない、／……勝利は偉大なものだと考えるのか、／それは勿論そうだ——しかし、私にはこう思われる、それ以外に仕方がないとしたならば、敗北もまた偉大であり、／そして死も困惑もまた偉大である⁽⁸⁾。」失敗者を慰めているのである。また、フランスが擾乱の果てに自由が再びよみがえった事件を歌ったものとして、「おお、星よ、しりぞけられて長らく苦闘していたフランスの船よ！頑張れ、悩まされたる天体よ！おお、船よ、汝の航路を続けよ！／……辛苦の日も過ぎた、長い間求められていた脱出であった、⁽⁹⁾」というのがあるが、この歌とほぼ同じ心を表わしたものがスペインについて歌われている。「封建制度の残骸と積み重ねられた諸王の骸骨の中から、／……荒廃した伽藍や崩潰した王宮、僧侶達の墳墓の中から、／見給え、いきいきと冴えた明かな『自由』の容貌が眺めている——おなじ不滅の顔が眺めている⁽¹⁰⁾。」『草の葉』全詩の序説的役割を演じている銘詩群の中にも、一度完全に奴隷になったならば、この地上のいかなる国も都市も、最早いつになってもその自由を再び取戻すことはできないのであるから、「抵抗は充分に、服従は少くせよ、⁽¹¹⁾」と警告している、靈魂を歌う詩人に靈魂の属性たる自由を尊しとするのは当然であるが、體質的にも彼は自由の子である。「君、自由を愛する和蘭人よ、／この私自身が君の血統の後裔だ⁽¹²⁾。」と、自分の母方の血統を重視していることに注目すべきであろう。

「『自由』は滅びることなく、『平等』は退くことがない。」という句はさきに述べたが、「『自由』の信頼は愛人となり、『平等』の持続は同志となる。」という句もある⁽¹³⁾。自由と平等とが対句のように唱えられるのはホイットマンに限ったことではないが、彼の場合は特にそれらが強調されている。宇宙の靈を頒ち分う各個人間に上下の差別はあり得ない。「おお、何という詩題——平等！おお、聖なる平等人！⁽¹⁴⁾」と所謂 average man, 或は common man の礼讃が全巻を覆っている。

先ず「自己の歌」の冒頭に、「私は自己を讃え、自己を歌う、／そして私が身につけるものは、また君も身につけ給え、／私に属するすべての原子は、ひとしく君にも属するのだから。」と歌っているところから見ても自己礼讃は、全く自己と等しなみに見る君の礼讃でもあり、彼の礼讃でもあって、平等無差別観が最初から頭かにされている。これに続いて「自己の歌」の中には同じ考が繰り返されている。「私が自分のものとして印つけたすべてのものを、君は君自身のもので相殺するがよい、／でなければ私の言うことに耳傾けるのは時間の空費だ。」⁽¹⁵⁾「すべての人の中に私は私自身を見る、麦粒一つほどの増減もなく、／それで私が自分自身について善といひ悪といふことは、彼らについて言っていることなのだ。」⁽¹⁶⁾「戸から錠前を取りはずせ／……誰であろうと人をけなすものは、この私をけなすものだ、／……私は原始的な合言葉を語り、デモクラシーの合図を与える、／誓って言うが、私はすべての人が同じ条件で相対物を持つことができないならば、私は何物も受入れはしない。」⁽¹⁷⁾

同じ考えを他の歌から引いて見よう。「私が同じ条件で注意深く他の人のためにも要求しなかったものは、何一つ私自身のために要求しなかった。」⁽¹⁸⁾「私としては、同様なものを気をつけて君に与えないならば、他の誰にも何も与えない、／私は君の栄光の歌をうたわなくては、何者の、神さえの、栄光の歌もうたわぬ。」⁽¹⁹⁾というのがある。更に「平等について——他人に自分と同じ機会と権利とを与えるために自分が傷つけられたと思ったり——他人が同じものを持っているため、自分の権利にとって大切なものではないと思う」⁽²⁰⁾人があると、感想を洩らしている場合もある。以上は自他無差別の心を表わしたものであるが、次に人に上下の区別をつけないという意を表わしたのを見よう。ホイトマンはすべて時と所とを得たものは等価値であると見る。

私は或るものをより偉大であり、或るものをより劣小であると呼びはしない、
その時と所とを占めているものは、他の如何なるものとも同等である。⁽²¹⁾

従つて職業の種別、貴賤貧富の区別などは彼には問題にならない。「私は君と対等でゆく、そして君も私と対等でくるがよい、／……大統領が君より偉いとしても君は考えていたのか、」「金持が、君よりよい生活をし、教育を受けたものが君より賢いとも思っていたのか。」⁽²²⁾「この国の、そしてあらゆる国の、屋内と屋外とを問わず、大人も青年も小児も、だれかれの差別なく私は平等に見る、／そして他のすべての人々をも彼らの背後に、また彼らを通して見る。」⁽²³⁾

他人を下に見ようとするのが世の常であるが、彼はこれに警告する。「誰もが君を服従させようとするが、私だけは君を従えることに同意しない、／私だけは君自身のうちに本質的のもっているもの以外は、主人、持主、より優れた者、神などを、君の上におかない。」⁽²⁴⁾そして画家が多くの群像を描く際、中心の人物を明かにするためにその頭に特に後光がさすようにすることがあるが、彼は「無数の頭を描いても、一つの頭も金色の後光なしには描かない、／私の手にかかるあらゆる男女の頭から燦然たる光が現われ永遠に流れ出る」と言う。⁽²⁵⁾

貴賤貧富の区別だてをしないホイットマンは、「棉畑であくせく働く者にも、便所掃除人にも私はもたれかかって、／その右の頬に内輪の者にする接吻を与える、／私は心の奥から決して彼を拒否しないことを誓う。」⁽²⁶⁾と断言し、「過ぎてゆく者もすべて考慮され、とどまるものもみな考慮される、唯の一人として考慮に漏れることはない。」⁽²⁷⁾として、忌み嫌われる職業の人々、娼婦なども対象となる。「おお、嫌われている人達、私だけは少くとも君達を避けはしない。」⁽²⁸⁾「落ついて——私には気楽にしているがよい、私は『自然』のように自由に元気なウォルト・ホイットマンだ、／太陽がお前たちを除け者にしないかぎり、私もお前を除け者にはしない。」⁽²⁹⁾

彼は日常周辺に見る各種の職業の人々とか、或は同国人のみを考えているのではなく、世界のすべての人々を考慮している。

私の精霊は思いやりと決意とをもって世界を經めぐった。

私は自分と平等の人々と愛人達を探した、そしてあらゆる国土で私を待ちうけている彼らを見出した。

私は或る神業の關係が私を彼らと平等のものにしたのに違いないと思う。⁽³⁰⁾

個人間の平等ばかりでなく、例えばアメリカの諸州についても、「各州と平等の条件で協議する」⁽³¹⁾ことを提唱し、

「私はこれらの諸州のために、その一州が如何なる理由があろうとも、他の州に支配されないように歌を作ろう、」とも言っている。世界各国についても、「私は私たちと同時代の国々の存在を認める、／私は地球の地理にくまなく足跡をつけて、大小すべての都市に慇懃な挨拶を送る、⁽³³⁾」と満遍なき考慮を約している。

- (1) *Song of Myself*, 20.
- (2) *A Song of Joys*.
- (3) *A Song of the Rolling Earth*, 2.
- (4) *Song of Myself*, 46.
- (5) *One Hour to Madness and Joy*
- (6) *Song of Myself*, 24.
- (7) *Europe the 72d and 73d Years of These States*.
- (8) *To a Failed European Revolutionaire*.
- (9) *O Star of France (1870—71.)*
- (10) *Spain, 1873—74*.
- (11) *To the State*.
- (12) *Salut au Monde!* 11.
- (13) *Over the Carnage Rose Prophetic a Voice*.
- (14) *Starting from Paumotu*, 10.

- (15) *Song of Myself, 20.*
- (16) *Ibid.*
- (17) *Ibid., 24.*
- (18) *By Blue Ontarios Shore, 14.*
- (19) *To You.*
- (20) *Thought.*
- (21) *Song of Myself, 44.*
- (22) *A Song for Occupation, 1.*
- (23) *Ibid., 2.*
- (24) *To You.*
- (25) *Ibid.*
- (26) *Song of Myself, 40.*
- (27) *Ibid., 43.*
- (28) *Native Moments.*
- (29) *To a Common Prostitute.*
- (30) *Salute an Monde! 13.*
- (31) *On Journey through the States.*
- (32) *Starting from Paumanok, 6.*
- (33) *Ibid.*

三 霊魂・肉体

宇宙の物象悉くに霊ありとするホイットマンのことであるから、「私は霊魂に関しない詩は一篇も、否、その極く一部さえも作ろうと思わぬ、／なぜと言え、宇宙の物象を眺めてみるに、どの一つでも、否、その一部分でも霊魂

に關しないものは見出されないからだ。」⁽¹⁾という言葉も無理からぬところである。事実彼の詩集の至る所に靈魂 soul の語があふれていて、名詞として頻度最大である。⁽²⁾

まず万有靈魂の意を表わす句を見よう。「私は私にふさわしい魂があり、自覚と本体とがあり、／すべての岩や山にも、また地球にもそれがあることを知っている。」⁽³⁾「靈魂を見たいと誰か言っていたのか、／見給え、君自身の姿と顔を、人間を、物質を、獸類を、樹木を、流れる川を、岩を、砂を。」⁽⁴⁾彼は靈の實在を信ぜぬ人のために「靈魂も實在である、／それはまた積極的で直接的である、／推理や証拠で確証せられたのではない、／生長という争われぬ事実がそれを確証したのだ」⁽⁵⁾と言い、またこの靈をイメージ化して、「他の一つの自己、各人の複身が忍びやかに身を隠してついてゆく。」⁽⁶⁾と歌う。

靈魂こそ真の實在であるとして、それに捧げる久遠の行進曲が歌われている。「時代を通じ民族を通じ、国土を通じて、亡びることなきもの、……／御身、数多き円体中の円体よ、／御身たぎりたつ原則よ！ 御身、完全に保存され潜在する胚種よ！ 御身、万有の核心よ！」⁽⁷⁾これは晩年の作であるが、エホバ、キリスト、サタン、聖靈の四者を歌う詩 *Chanting the Square Deific* の第四節で、「聖なる精靈、息吹を吹きこむもの、生命……空氣のようにあらゆるものに滲透する、（なぜならば、私なくしては一切が何であろうか、神が何であろうか。）／形態の本質であり、永久的で積極的な真の本体の生命（即ち・不可見のものだ）／巨大な円体の世界の生命、太陽と星辰とそして人間の生命、私こそその普遍的な靈魂。」と靈魂を讃える。

不可見の靈魂が一切の根元であるという考を更に他の詩に見よう。 *Grand Is the Seen* に見よう。 可見の大地や光や海原や大空は偉大であるが、それより更に偉大なものは眼に見えぬ、それらを含み、それらを与える靈魂であるとして、「眼に見えぬ靈魂よ、御身なくしてそれらの一切は一体何であろうか、御身なくして何の価値がであろうか。」と歌う。

て、可見のものより更に進化的で廣大無辺、しかも永遠なる靈魂を讃えている。そして近代科学の至上命令を認めるのに吝かではないこの詩人も、「しかも見よ！あらゆる科学の上にある靈魂、／そのために歴史は地球をとり巻く殻の如くに集まる、／そのために無数の星群はすべて天空を回轉する。」と歌っている。

こういう靈を頒けもつ一個体として自分を見れば、「一切のものの主人であり、一切のものの主婦であり、矛盾する万象の中に自若として、」立つことができるものとして自己を感じる、従って、「おお、至高なる我が魂、」という歓喜の呼びかけも発せられるのである。

靈魂の不滅を歌う句は多い。「靈魂／それは永遠無窮——褐色で堅牢な大地よりもとこしえに——満ち退く潮よりもはてしがない。」⁽¹¹⁾「私は断言する、私はいま一切のものが例外なしに永遠の靈魂をもつと考えていることを！：私は断言する、不滅の他に何もものもないと私が考えていることを！」⁽¹²⁾「星よりも更に不滅のもの、」⁽¹³⁾「弾丸も真の君を殺すことができぬ、親しき友よ、／銃劍といえども真の君を刺し殺すことができない。／靈魂！君自身を私は見る……」⁽¹⁴⁾

このように万有靈魂、靈魂不滅というホイットマンの抱く根本の信念が知られるのであるが、更に靈の働きとして彼が述べているところを見よう。「魂を満足させるものは如何なるものでも真実である。」⁽¹⁵⁾というが、真実なるものを求める魂の欲求は永遠に尽きない。「永遠に魂は満足せず、最後まで好奇心を抱き納得し得ない、／今日また依然としてもがき、依然として闘っている。」⁽¹⁶⁾「星空を仰ぎ、私は私の靈に言った、『これらの天体とその中の一切のものの悦びと知識を身につけたならば満足か』と。精靈は答えて言う、『否、その高みをならして更に先へ旅しつづける』と。」⁽¹⁷⁾「この靈魂の旅は、屢々航海に譬えられる。「あらゆるものの上を、あらゆるものの中を、／『自然』⁽¹⁸⁾『時間』、『空間』を貫いて、／あたかも水の上を進む船のように滑ってゆく、／魂の航海……」⁽¹⁸⁾「おお、魂よ、

御身と共に滑ってゆく、あらゆるものの上を、あらゆるものの中を海をゆく船のように。」⁽¹⁹⁾

靈魂は生命の原理であるから、生命の流れを想うとき、靈魂の旅、若しくはその行進というイメージは容易に生れる。特に宇宙進化を信じる詩人としては、その進化の頂に立つ人間の靈を主として見れば、「一切のものは靈魂の行進に道をあけて去る、／……宇宙の壯麗な大道をゆく男や女の靈魂の行進から言えば、他のあらゆる行進は、それに必要な標章であり、栄養物であるに過ぎない。」⁽²⁰⁾と歌うのも極めて自然に聞こえる。魂の旅という表現は初期の作品から現われているが、魂の航海という表現は南北戦争後の作品に現われ晩年まで続いている。一八七四年、ニュージャージー州キヤムデンの或る公立学校の開校式に寄せて歌ったものに、「輝く眼……君たちの若い生命、／船、不滅の船の船隊のように建造され、艤装されて、／やがてはて知らぬ海原へと船出せんとしている、／魂の航海に、」⁽²¹⁾というのがある。多難な人生航路の船出に当り、若い学徒の前途に想を馳せて、永遠の生き方への暗示を与えているものと見られる。

靈魂の不滅性をもととした魂の旅の観念でありながら、それに靈の知的な働きを結びつけたものがある。「海をすべて渡りつくして……／神に面す……／友情と完全な愛に満たされたように『兄』は見出され、／『弟』は彼の腕の中に、その愛撫の中に溶けこんでゆく。」⁽²²⁾この句は「印度への航路」という作品からであるが、大陸横断鉄道や大西洋海底電線やスエズ運河等の開通で、世界一周の交通網が整い、文字通り印度への航路が容易になったことに因んで、世人が俗智にまどわされず、東洋的な直観の叡智にたち還れという意を、個人の魂といわば大靈との会合にとよせて歌っているのである。

『草の葉』の最初にのっている「人の自我を私は歌う」という一篇には、「生理学に関しては頭のとっぺんから足

の爪先に至るまで私は歌う、／詩神にとって価値あるものは人相ばかりではない、また脳髓ばかりでもない、敢て言
えば完全な『人体』こそ遙かに価値があるのだ、」と歌っているが、ホイットマンが同時代人を驚倒させたものに先
ずこの肉体礼讃の言葉がある。

歓迎すべきは私の、そしてまた真心あり汚れなき人の、肉体のあらゆる器官と属性だ、

その一インチも、また一インチの何分の一も卑賤なものはない、さらにそのいずれも他のものと同じく私にと
っては親しいのだ。⁽²³⁾

若し私が他のものに勝って崇拜するとすれば、それは私自身の肉体の全体か、或はその一部分だ。⁽²⁴⁾

と肉体尊重論が始まるが、肉体礼讃賦で知られる所謂「エレキ」の歌を聴こう。「私はエレキに充ちた肉体を歌う、
／私の愛する人々の群は私を取りまき、私もまた彼らを取り囲む、／……魂の電流をもって完全に彼らを充電する
まで私を去らせない。⁽²⁵⁾」「男女の肉体の愛は説明を斥ける、肉体自身が説明を斥けるのだ、／男子の肉体は完全で
あり、女性のそれも完全である、／……完全な肉体の男子の表情は彼の顔のみに現われるものではない、／それ
は彼の四肢や関節にもある、不思議にも彼の臀部や手首の関節にもある、⁽²⁶⁾」「男の肉体は神聖である、そして女の
肉体も神聖である、／それが誰であろうと神聖である……⁽²⁷⁾」「若し何かが神聖であるとするれば、それは人間の肉体
である／……男子または女子の清浄で頑健で強靱な肉体は、最も美しい顔に勝る。⁽²⁸⁾」他の詩からとると、「人間の肉
体は言葉である、無数の言葉である、／最善の詩の中に男または女の均斉のとれた自然な陽気な肉体が再現する、⁽²⁹⁾
という句があり、肉体にすぐれた表現を与えんとする意気込みが示されている。

こういう神聖論の根拠は、彼の所謂霊肉一致論にある。

見よ、肉体は意義を包含し、また意義そのものであり、それが重要なことである、また魂を包含し、魂そのものでもある。

君が誰であろうと、君の肉体は、或はその何れの部分でも、いかに壮麗で、いかに神聖であることか。⁽³⁰⁾

この霊肉一致の思想を表わす句は随所に見られる。「私の魂よ、私は君を信頼する。私の他の部分たる肉体も君に対して卑下してはならない、／そして君も肉体に対して卑下してはならない、⁽³¹⁾」「霊魂は肉体以上のものではないと私は曾て言った」⁽³²⁾「おお、肉体よ！私は他の男や女の中にあるお前の同類や、またお前の部分と同類を見捨はしない、

／私はお前の同類は霊魂の同類と進退を共にするものだと思ふ、（そしてそれらは霊魂だと信ずる、⁽³³⁾）」「この肉体と相似のものは私の詩篇と運命を共にするものであり、私の詩篇であるとして、身体の各部分、文字通り頭のとっぺんから足の先に至るあらゆる部分を列挙した後で、「おお、これらはただ肉体の詩だけではなく、実に霊魂のそれだと私は言う、／おお、いま私はこれらこそ霊魂そのものだという！」⁽³⁴⁾

上記の「エレキ」の歌の中に「女は肉体の門」で知られる句があって、誤解の種子ともなっているが、それはその句だけを引き離した結果であって、前後を見ると、

Be not ashamed women, your privilege encloses the rest, and is the exit of the rest,

You are the gates of the body, and you are the gates of the soul.

The female contains all qualities and tempers them,⁽³⁵⁾

女達よ、恥じることはない、あなたたちの特権は他のものを包含し、そしてまた他のものの出口であることだ、

あなたたちは肉体の門である、そしてまたあなたたちは霊魂の門でもある。

女性あらゆる素質を具え、それらを調和せしめる、

と、女性を讃えているが、これは霊魂の個性化の場を与えるものとして母性礼讃に連なるものである。

霊肉不離の関係を説くために、航海の譬えを挙げている場合がある。それは航海する実際の船と、船上で注意深く舵をとっている若者とをうたいながら、転じて魂の航海をする人間を、**肉体の船、霊魂の船と呼ぶ。**「しかし、お、船よ、不滅の船よ！船の上なる船よ、／**肉体の船、霊魂の船、それは果てしもなく海をゆく。**」⁽³⁶⁾

宇宙の本体を霊魂と見、霊魂と物象とは相即不離の関係にあるとするホイットマンにとっては、**霊肉一致の考えは極めて自然なものである。**いまこの関係を示す句を見よう。「**変った難解な真の逆説を私は与える、／粗雑な物象と目に見えない霊魂とは一体のものである。**」⁽³⁷⁾「**諸々の現象よ、今でも、これから先でも、お前たちが何ものであるかを示せ、／汝、欠くことのできぬ薄膜よ、霊魂を包みつけよ、／……伸び広がれよ、恐らくこれ以上霊的なものがない存在よ、／立場を守れ、これ以上恒久的なもの他にない物象よ。**」⁽³⁸⁾

このように神聖視する肉体ではあるが、現実の肉体に伴う矛盾混沌について、彼は無関心ではない。「私もまた永遠に不定な混沌たるものから打ち出されたのだ、**「私もまた肉体によって私の正体を与えられたのだ、／私というものは、私の肉体から成っていたことを知り、また私たるべきものも、私の肉体から成ることを知る。**」⁽³⁹⁾これは「ブルックリン渡船場を渡って」の句であるが、その第六節に、**煩悩、憎悪、貪欲等の黒い影のさす肉体の矛盾を描いている。**この自覚があればこそ、「私は『**肉体**』の詩人であり、また『**霊魂**』の詩人でもある。天国の愉楽は私と共にあり、また地獄の苦悩も私と共にある。」⁽⁴⁰⁾という一見矛盾の言葉も、私という統一体のもとに統合されるという確信

にもとづいて述べられている。

次に、「私もまた私の靈魂と肉体と共に在るもの、／私達不可思議な三位一体は……」と歌って、私の他に私の靈魂と私の肉体という三者を想定できるホイトマンであるが、多くの場合、肉体に対して靈魂のことを眞の自己と呼んでいる。しかしここに靈魂を肉体とは別個の一体としてイメージ化し、これを「眞実の肉体」と称している場合がある。これは靈魂の實在を信ずるホイトマン独特のイメージである。

一切のものは靈的な喜びをもち、後にそれらを解放する、

どうして眞実の肉体が死んで埋葬されるようなことがあり得よう。

君の眞実の肉体と、あらゆる男女の眞実の肉体とは、

その細部までも、死体を浄める人々の手を逃れ、

誕生の瞬間から死の瞬間までに自分のものとなったものを携えて、安住の世界へと移るであろう。(42)

即ち、眞実の肉体は屍体清掃人の手を逃れる。靈魂の抜け出た空蟬の肉体は清掃人の手にかかり、やがて大地をこやす肥料となるが、逃れ出る眞実の肉体は久遠の肉体である。「御身の不変の肉体、／その肉体はそこに御身の肉体のうち潜在している、／御身はその形態の含まれた意味に過ぎない、／眞の私は私自身なのだ、／一つの影像であり、一つの幻霊だ。」(43) この眞実の肉体のイメージを伴う句を選んで見よう。「私が知っているこの足許から、また両手や顔の傍から、私の見知らぬ落付いた実際の顔がいま窺っていることを疑わない。」(44) 「あなたの方へ振り向く靈魂、おお、深くヴェールに包まれた大いなる死よ、そして肉体は心地よげにあなたそば近くより添う。」(45) 「君の眞実の靈魂と肉体とが私の前に現われる、／それらは種々の物事の中から現われて来る……」(46) 「生きている人達は

その視力で亡骸を眺める、／しかし視力をもたない別の生きた者が、まだ不思議そうに亡骸を眺めている。⁽⁴⁷⁾「私は、肉体的にも霊的な不滅の君自身を除いたすべてのものから、君を解放する、君自身は必ず逃れ出るであろう、／君があとに遺す亡骸は排泄物にすぎないであろう」⁽⁴⁸⁾「焼きすて、粉末とし、或は埋めるために、私の排泄物からなる肉体を自ら解き放つ、／私の真の肉体は疑もなく他の世界のために私に残され、／空虚な肉体は私にとって最早何ものでもなく、大地の浄化作用と、更にいろいろな役目や永遠の用途に還される。⁽⁴⁹⁾」

こうして真実の肉体はイメージ化されて有形の存在を思わしめるが、もとより霊のことであるから可見の物質の姿ではない。「私の感覚と肉体の真実の生命は私の感覚と肉体とを超越している、／私の肉体は物質と縁を絶った、私の視覚は私の肉体の眼とは縁を絶った、／今日こそ理屈を越えて最後に見るものは、私の肉体の眼ではないことが、／また最後に愛し、歩き、笑い、叫び、抱擁し、子を産むものは、私の物質的な肉体ではないことが、私には明らかになった。⁽⁵⁰⁾」

- (1) *Starting from Paumanok*, 12.
- (2) Edwin Harold Ebbys, *A Concordance of Walt Whitman's Leaves of Grass and Selected Prose Writings*, (soul, souls 計 284.)
- (3) *Song of the Redwood-Tree*, 1.
- (4) *Starting from Paumanok*, 13.
- (5) *A Song of the Rolling Earth*, 3.
- (6) *Song of the Open Road*, 13.
- (7) *To the Old Cause*.
- (8) *Song of the Universal*, 2.
- (9) *Me Imperturb*.

- (10) *A Song of Joys.*
 (11) *Starting from Paumnanok, 6.*
 (12) *To Think of Time, 9.*
 (13) *On the Beach at Night.*
 (14) *How Solemn as One by One.*
 (15) *Song of Prudence.*
 (16) *Life.*
 (17) *Song of Myself, 46.*
 (18) *Gliding O'er All.*
 (19) *Warble for Lilac-Time.*
 (20) *Song of the Open Road, 13.*
 (21) *On Old Man's Thought of School.*
 (22) *Passage to India, 8.*
 (23) *Song of Myself, 3.*
 (24) *Ibid., 24.*
 (25) *I Sing the Body Electric, 1.*
 (26) *Ibid., 2.*
 (27) *Ibid., 6.*
 (28) *Ibid., 8.*
 (29) *A Song of the Rolling Earth, 1.*
 (30) *Starting from Paumnanok, 13.*
 (31) *Song of Myself, 5.*
 (32) *Ibid., 48.*
 (33) *I Sing the Body Electric, 9.*

- (34) *Ibid.*
- (35) *Ibid.*, 5.
- (36) *Aboard at a Ships Helm.*
- (37) *A Song for Occupations*, 5.
- (38) *Crossing Brooklyn Ferry*, 9.
- (39) *Ibid.*, 5.
- (40) *Song of Myself*, 21.
- (41) *Pioneers 1 O Pioneers 1*
- (42) *Starting from Paumotuok*, 13.
- (43) *Eidolons.*
- (44) *Assurances.*
- (45) *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd*, 14.
- (46) *To You.*
- (47) *To Think of Time.*
- (48) *To One Shortly to Die.*
- (49) *A Song of Joys.*
- (50) *Ibid.*

四 死 生

『草の葉』は、永遠の生命の讃歌でもある。生命の讃歌と言えば、人はロングフェローの *Psalm of Life* を思い出すかもしれないが、あれは個人の一生涯に亘る生命の意であって、所謂人生の讃歌である。ここにいう生命は、死の繰返しにより永遠に続く大いなる生命の意味であって、「その情熱、その脈搏、そしてその活力の宏大なる生命」⁽¹⁾

は、受け継がれることを前提としている。「彼らはどこかに生きていて健在だ、／どんなに小さな芽でも實際死というものがないことを示している、／もしあったとすれば、生命を推し進めたもので、最後に生を捉えようと待つのではない、／そして生命が出現した瞬間に死は無くなっている。」⁽²⁾

従って生命は死の遺物であるという考も成り立つ。「御身、『生命』について言えば、私は御身を多くの死の遺物だと思ふ、／(疑いもなく、私自身これまで一万回も死んでいるのだ。)⁽³⁾」死生の繰り返しは潮の満干に譬えられて、黄昏の光や落潮に呼びかけながら、「たしかに君たちによって、君たちから、潮流と光とが再びやってくる、必ず扉の蝶番が回される／……君たちから、『睡眠』と『夜と死』そのものから、／不滅の『誕生』の韻律が織り出される。」⁽⁴⁾

さらにこの繰り返しは多年性の植物によって象徴される。多年生の植物は *Scented Herbage of my Breast* を始め、再々登場するが、ホイトマンの最も好んだ例は、春毎にハート型の葉と、紫や白の花をつけるライラックである。リンカン追悼賦中の所謂ライラック・エレジー *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd* は、死生の悟りと個人の死への悲しみとの衝突、やがて小我の死は大我の生長としての大いなる悟りに達する心の葛藤と、その昂揚の過程を歌ったものであるが、そこでは復活の象徴としてライラックは、「すべての柩へ」⁽⁵⁾ 齎せられる。

死から生が生ずるといふ考えは自然(宇宙進化)の項でも触れたが、屍体でさえも新たな生命の躍進に役立っている。そのみではなく、もとの肉体に宿っていた魂は不滅のまま他界に旅し生き続けている。(真の肉体の項参照) 霊として生を続けるのであるから、死生一如であって、「死ぬということは、誰もが想像するところとは異って、より幸福なものだ、」⁽⁶⁾ 「定命というきびしい抱擁、汝『死』よ、私を愕かそうとしても無駄だ。」⁽⁷⁾ と言ひ、死に呼びかけ、
「私は歌を作るが……あなたへの恐怖からではない／陰惨な峡谷、荒涼、暗黒への恐怖でもない、／何故なら、

私はあなたを怖れないからだ、」とも言い切れるのである。⁽⁸⁾

死を怖れぬという心は、南北戦争前はどちらかと言えば観念的なものであったが、多くの戦死者の臨終に居合わせ
てからは現実的になっている。「何故なら、私はこれまで多くの傷兵の死ぬのを目撃した、恐ろしい苦しみの後に
——彼らの生命が微笑と共に消えゆくを見た、⁽⁹⁾」「彼ら自身は安らかに瞑目していた、彼らは苦しまなかった。⁽¹⁰⁾」
「若者よ、私は君を知っているように思う、／私はこの顔がキリストその人の顔であるように思う。⁽¹¹⁾」と、最後の場
の意外に安らかな表情を見てとっているのである。

上述のライラック・エレジーの第一四節中には、今はその題がないが、もと *Death Carol* と題のつけられていた死
の讃歌が入っている。そこでは、しずかに到来するやさしい、なだめ和らげる死を讃えて、「近寄れ強き解放者よ、
／時が来て、御身が彼らを連れてゆくとき、私は喜んで死者を歌おう、／やさしく漂う御身の大洋につつまれ
て、／御身の至福の洪水に浸っているのを、おお死よ、」など七節二八行に歌いあげているが、個の束縛より大霊
へと還らせる解放者として死を讃え、死の本義を悟らせるものである。ホイットマンにあっては死はつねに不滅と共
にある。「いま私は不滅と平和とを吸収して、死を讃美し諸々の命題を検討する。⁽¹²⁾」

次に死は不可見の世界を知らしめるものであるとして、「おお、私は昼がなし得ないように、生命は一切のものを
私に展示することができないと悟った、／私は死によって展示されるべきものを待たねばならぬことを悟った。⁽¹³⁾」
と「草原の夜」に想っている。これと同じ考えを他の詩に見よう。「白昼のまぶしい光が去った後に、／ただ暗い暗
い夜が私の眼に星を見せてくれる、／荘厳なオルガン、または合唱、または見事な楽隊の響の後、／私の魂を横
切る沈黙が真の交響楽を奏でる。⁽¹⁴⁾」「こうして私は、声あり、眼に見え、矛盾した暫くの時を過ぎて、「その後で妙
なる木霊に情熱的に心を傾ける、（死は私を真に不死ならしめる。）／私が、『最善』な時は、もはや人目に見えぬ

時だ、／なぜならば、そのために私は今まで絶えず準備をしていたのだから。⁽¹⁵⁾」最善へと導く死の功德を農耕に譬えて、「私は、そこにも、おお、生と死よ、君たちと似寄りのものを見たのだ、／（生、生は耕作であり、そして『死』はそれに伴う収穫である。⁽¹⁶⁾）」と歌う。このようにして生命の讃歌は、転じて死の讃歌として不可見の世界に献げられるものとなる。「眼に見えるこの世界をゆく私の旅を元気づけるために歌われたこれらの歌を、／その完成のためには私は『不可見の世界』へと献げる。⁽¹⁷⁾」「既知の世界に属するものは結局は『未知』の世界へと昇ってゆき、そこへ入るためのものではないか。／そして生のそれらは結局『死』のためのものではないか。⁽¹⁸⁾」「歳月は私というもの、或は他の誰でも存在を阻止するものではないと思う。⁽¹⁹⁾七十年という歳月は男女の命数ではない、何万年であろうと限られた年月は命数ではないというのである。

ホイトマンにおいての死生一如の悟りは以上で察せられる。そしてこの悟りを大衆に知らしめることが彼の希いでもあるが、死生の問題がすべて解決済であると彼が考えているわけではない。*Life and Death* と題して、「永久にからみあっている二つの古い単純な問題、／最も身近かで、しかも捕え難く、その場にありながらはぐらかされ、また取り組まれる、／どの時代にも解かれぬままに次々と伝えられ、／今は私たちの時代へ——そして私たちはまた同じく次へと伝える。」と歌っているのである。また気弱な時には人生の意図についても、「確実に永遠に続けて織れ、昼も夜も、緯糸を、経糸を、絶えず織り続けて倦いてはならぬ、／（おお、生命よ、私たちはそれが何の役に立っているかを知らぬ、またその意図も、目的も、私たちは全く何も知らないのだ……⁽²⁰⁾）」と生命への懷疑を表白している場合もある。

しかし生命が安易に勝ち得られたものではないことを示して、「勝利、統合、信仰、本体、時、／牢固たる結合、富、神秘、／永遠の進歩、宇宙、／そして近代の諸報告。／これこそ正に生命だ、／多くの劇痛と痙攣とを経て表面

に現われ出たものがここにある。」と歌い、従って生命のために戦う気構えを求めて、「敬神と遵奉とはそれらを好む人々に、／平和と肥満と忠誠とはそれを好む人々に、／この私は、『君らはその坐席から飛び出して、君らの生命のために戦え』と、ののしり叫んで、／男女の人たちや国家に強制する者だ」と、猛々しく叫んでいる。

そして個人生命についての最後の見解は、いのちの流れを歌うものと考えられる「秋の小川」*Autumn Rivulets* 詩群中の第一詩、*As Consequent, Etc.*に見られる。「先ず初めに生命の永遠に新たなる早瀬を歌う、（それは早く、早くも死の古い流れと合流する。）」即ち弁証法的な悟りで、生のうちに死の要因が内在し、誕生と共に死が初まるという考えを明かにしている。従って、「思いに沈み、ためらいながら、／私は『死者』という言葉を書く、／なぜならば、『死者』は生きているのだ、（恐らく、唯一の生きているもの、唯一の真実のものだ、／そしてこの私は幻影だ、変化^{へんげ}なのだ。）」と、事改めて死者と呼ぶのを躊躇している心が解るのである。

- (1) *One's-Self I Sing.*
- (2) *Song of Myself, 6.*
- (3) *Ibid., 49.*
- (4) *And Yet Not You Alone.*
- (5) *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd, 7.*
- (6) *Song of Myself, 6.*
- (7) *Ibid., 49.*
- (8) *Death's Valley.*
- (9) *Ibid.*
- (10) *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd, 15.*
- (11) *A Sight in Camp in the Daybreak Gray and Dim.*

- (12) *Night on the Prairies.*
- (13) *Ibid.*
- (14) *After the Dazzle of Day.*
- (15) *So Long!*
- (16) *As I Watch'd the Ploughman Ploughing.*
- (17) *These Carols.*
- (18) *Portals.*
- (19) *Who Learns My Lesson Complete?*
- (20) *Weave in, My Hardy Life.*
- (21) *By Blue Ontario's Shore, 4.*
- (22) *Pensive and Faltering.*